

とある街にて停泊中の  
グランサイファー

『みんな各々街を見てまわってるし  
ボクはお昼寝でもしてようかな』

『こんにちはお嬢ちゃん』

『うっ』



『お嬢ちゃん、騎空団の人でしょうか？』

『ふえ？ そうだよ』

『やっぱりそうだね  
今キャンペン中でね  
お疲れの騎空団の人たちに  
マッサージをして回ってるんだ』

『マッサージ？  
え、でもボク  
お金ないよ』

『ハハハ、大丈夫  
初回はお試しというところで  
無料なんだよ』

『そっか、あんそれなら  
時間あるしちょっとだけ……』



『マッサージはどうかな?』

『んっ……えと、  
こういうのはじめてだから  
ボクよくわからない……な……  
ちよっとだけ気持ちよくなってきた、かも……』

びくんっ

びくんっ

ぽんぽん

ぽんぽん

『長い旅できっとこっぴてるんだろうね  
慣れてくるともっと気持ちよくなるからね』

『うっ……うん』



『よおし、仕上げだ』

んおおお  
んおおお  
んおおお

『アッ……アッ……』

んおおお  
んおおお

んおおお  
んおおお  
んおおお

んおおお  
んおおお

んおおお  
んおおお

『うっ……なんかっ  
ドクンッドクンッとしてるっ』



『おほ〜♥  
たっぷり射精たあ〜  
気持ちよかった?』

『う、うん、気持ちよかった?  
のかな……  
おまたが変、なんか出てる……』

『これはマッサージュがよく効く  
おくすりみたいなものだよ  
らっばら塗り込んでおっつね』

『また来たかったら  
次からは500ルピ持ってきてね』

『え、あ、うん……』





屋間の感覚が忘れられず  
それが自慰行為とも知らずに  
ひとりエッチを繰り返していた



『何回やっても足りない……』

『自分のマッサージじゃだめ……  
明日も……い、いこうかな……』

『お金、あったっけ……』



『どうしよう  
どうしよう……おまた  
擦るの止まんないよ……  
ボク、おかしくなっちゃったのかな……』



「それから数日、我慢ができない時は  
マッサージに通う日々が続いていた」



お金が足りず、団の資金に  
手を付けてしまうことも少なくなる  
そんな生活が2週間を  
過ぎようとしていたある日

















